

「青垣」大阪句会 (大阪府・豊中市) 2~3

小西瞬夏 (岡山県・岡山市) 4

「歌舞伎を詠む」⑥ 俳人 小泉芝雲 16

## にいがた 食の歳時記 ~のっぺ~



冬ですね。こんな寒い日は、「のっぺ」が食べたくなる。「のっぺい汁」ではなく、「のっぺ」。汁ものではなく、煮物である。里芋や蓮根の根菜を中心に、いろいろな野菜が入っている。お正月だけではなく、通年食べられている家庭料理だ。家庭料理なので、各家庭で味も具材も様々。イクラがのることもあり、そうすると「お正月だなあ」という気分になる(うちだけか?)。冬は温かく、夏は冷やして食べてもおいしい。最近では居酒屋さんなどでも食べられるらしいので、新潟にお越しの際はぜひ味わってみてほしい。

# 喜怒哀楽

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニユース

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミュージック・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

12-1  
Vol.107

## 温古知新 59 「菜根譚」31

すっかり冬ですね。外に出る機会も減つたりしますが、そんな時は「菜根譚」でも!

意を曲げて人をして喜ばしむるは、躬を直くして人をして忌ましむるに若ず。善を無くして人の誉れを致すは、悪くして人の毀りを致すに若ず。

(信念を曲げて他人を喜ばすのは、身を正して他人に嫌われるようなものである。善い行いをしていないのに人に褒められるのは、悪くないのに他人に非難されるようなものである。)

自分の意思を強く持ち、行動する。それが一番なのかもしれませんね。

父兄骨肉の変に処すは、宜しく従容たるべく、宜しく激烈なるべからず。朋友交游の失に遇いては、宜しく割切なるべく、宜しく優游たるべからず。

(親兄弟の身に異変がある時は、落ち着いて対処し、感情的になつてはいけない。親友や仲間の過失に於いては、適切に忠告し、のんびりとしてはいけない。)

身内、知人の別なく冷静に迅速に当たる。それができてこそ!

小処に滲漏せず、暗中に欺隠せず、末路に

怠荒せず。纔かに是れ個の真正の英雄なり。

(小さな事でもなおざりにせず、見られていなくても誤魔化さず、どん底でも投げ出さない。このことが出来て、本当の英雄と言える。)

いつ何時も、不正なくいられる事が大事なのですね。

千金も一時の飲を結び難く、一飯も竟に終身の感を致す。蓋し、愛、重ければ反りて仇となり、薄極まりて翻りて喜びと成るなり。

(たくさんのお金を使つても、その場限りの喜びを手に入れるのは難しく、たった一回の食事で生涯で一番感動することもある。思うに、情が重すぎれば害を及ぼすこともあり、薄情が却って喜びとなることもある。)

量の問題ではなく、質の問題、ということでしょうか。「適度に」が一番難しいことでもありますね。

今回は、116項まで。万事、公平に冷静に、過不足なく、は、なかなかできる事ではありませんが、身に着けて行ければと思います。

(古川久美子)

# 「青垣」大阪句会

代表 大島雄作様

(大阪府・豊中市)

11月3日の文化の日、大阪府教育会館で開催された「青垣」大阪11月句会にお邪魔しました。2007年に創刊した「青垣」は季感を大切にボエジー豊かな句を平易な言葉で詠むことをモットーとしています。

● 9点  
本日の席題「文」を含む7句出しで11句選、うち1句を特選。高得点句よりその句を採った方が、講評をします。

● 6点  
古本屋に探す青春夕焼 雄作

自分の青春の頃の本が古本になっていて、今晩年にさしかかっている。冬夕焼が鮮やか／青春を探すというのは色々あるが、これはうまい。

● 6点  
小春日や乳母車より犬の貌

子どもだと思って見たら犬だった、そういう感覚のズレというか意外性。としたか



▲以前は新聞記者だった代表の大島雄作さま



▲季刊「青垣」最新の51号

大島：よく見かける光景だが、これは老犬だと思う。犬の足が弱ってきて、乳母車に乗せて散歩。小春日が似つかわしくうまくまとまっている。いつもカスタネットだったな秋夕焼

千恵子

小学校低学年くらいの音楽の時間なのか、ピアノやバイオリンを弾ける子はわずかで、ほとんどはその他大勢のカスタネット。子ども時代への郷愁、その他大勢の気持ちに共感した。大島：もう少し何か入れられないかと思っただが、見たことのない句。カスタネットは可愛らしいし悪くない。

● 5点

図書館の混みみて静か冬に入る

美賛子

図書館の静謐な感じと、冬に入るという季語がぴったり。大島：図書館が静かというのは常識。混んでいて静かもその通りだが、少し理屈が入っている。そこは気にはなるが、春夏秋冬では冬が一番似合っているし一応できています。文士なら早死にもよしふくと汁

すずめ

今日の席題の「文」、ちょっと決めすぎな感はあるが、綺麗にできています。ただ、ふくと汁はどうか？／ふく

にあたって早死にしてもいいという、文士たることの本音がよく出ている。大島：ふくと汁の表記、ふぐ汁のことだと思いがあまり言わない。文士・早死はわかるし、決して悪くはないが、季語が決まり過ぎて採らなかつた。

● 4点  
十一文半に銀杏踏まれけり 雄作

十一文半がどれくらいかわからないが、銀杏の小ささとの対比がいい。司会：私十一文半。足大きいです。代表お願いします。大島：作者です。私小さいです(笑)。子の尻尾つかめば抜けしハロウイーン

翔子

何かの仮装をしていて、尻尾を掴んだらそのまま抜けて走っちゃった。大島：どういいうタイミングで掴んだのかしつぽが抜けて、子どもも掴んだ人もびつくりしたという、ハロウイーンらしい景。乳牛のモンローウオーク草紅葉

としたか

乳牛の歩き方をモンローウオークと言ったその発見に驚いた。大島：こう言えないこともないが、ちよつと面白すぎ？という気がした。後もどりできぬ文明蚯蚓鳴く 美賛子

季語も調子もよくて一回読んだら覚える句、さらに席題だったという驚き。大島：席題と思わず採った。利便性を追求してきた人間、元に戻ることはできないという気持ち。そこに悲しいというか、寂しい季語の「蚯蚓鳴く」。

● 4点  
封緘の糊を塗り足す一葉忌 英典

糊を塗り足すという繊細なところ

と、深読みしたら一葉はこういう内職をしていたかもしれないと思ったり。趣味的かなあとと思っただが、特選に。パンくづを撒いて案山子を審査せり 希妙

この案山子は本当にすずめを追い払えるのだろうか、という遊び心がよく特選に。大島：「審査」とあるので、案山子コンテンツだと思ふ。パンくづを撒くとはすずめを集めること。変わった発想とは思ったが、ほんまとは思えなかつた。

十円のガムの当たりや小六月 一樹  
駄菓子屋を回想した句かと思つた。子ども達のほっこりした感じがいい。大島：悪くはないが、その程度ではあまり驚かないなと思つて通過した。熱爛や今も志望は文学部 翔子

今も文学部が諦めきれないと、お酒を飲みながら振り返っている。大島：まとまってはいるが、志望は文学部といつても今更入れるわけではなく、どうなんだろうなと思つた句。朝寒やふはふはと食ふ伊勢うどん 千恵子

伊勢うどんは柔らかいので、「ふはふは」と急いで食べた感じが出ています。大島：伊勢うどんの固さとは逆。そのあたりを「ふはふは」が柔らかさも、熱いものを食べている感じも表している。「朝寒」の季語は似合いすぎかもしれないが悪くない。

● 4点  
水洩や紙ひかうきの急降下 英典

水洩で頼りない心持ちになつている時に、紙飛行機を見ていたらぐんと落



ちて、余計心もとない気持ちになった  
ということか。

司会：紙飛行機で鼻かんでるんちゃう？(笑)

大島：水洩という季語であまりない句で、取り合わせも面白い。紙飛行機を飛ばしても、なかなか上手くないことと、自分の体調が悪いこととの関係で作ったのか。

醉芙蓉土に一献傾けん 希妙

醉芙蓉がお酒を飲んだように赤く見えることと絡めた面白い句。

大島：気持ちいい夕暮れになって縁側でお酒を楽しんでいる。醉芙蓉の色が変わっていく様を見ながら盃を垂らして、その酒を含んだ土でまたきれいな色をつけてくれよと思っている、大人の句のような気がした。

●3点

カルデラは地球のにきび鳥渡る 清吾

季語が大きいかと思ったが、大きな目でみたらカルデラはそんな感じか。大島：スケールの大きい句だと思っが、カルデラはくぼんでいる、にきびは吹き出物みたいなもの。他の表現があったのでは？という気がする。

文机の向きを変へたる今朝の冬 茂

冬になり文机を明るく方へ向きを変えた動きがわかる。

大島：悪くないが、中七まで割と見る表現。「今朝の冬」も、どの程度効いているかわからない。

ほかの句

マネキンのぼつと口開け秋の声 三江子

マネキンがぼつと口を開けている状況をとらえた面白さ。

大島：マネキンが声には出せないが何か喋ったみたい、ということを感じた季語の置き方か？薄く口を開けているマネキンは見たことあるが、ぼつとじゃないと思う。

男性：ポットじゃない、急須くらい(笑)。

男性：万事休すやな。

冬の蛾や終電過ぎのイトイン すずめ

新しい句。終電を逃してコンビニのイトインでパンをかじっている。失敗したなあ、飲みすぎたなあ、と思っ

大島：大都会の現代の句。朝までいるのかわからないが、冬の蛾と合わせて、都会の中でやるせない孤独を感じているという像が浮かんで特選に。

海に入る川の明るき時雨かな 清吾

なにも言っていないけどシンプルだが、時雨が効いている。

大島：読んだときにつつかえることもなく調べも句の姿もいい。ただ「明るさ」と「時雨」はどうかということ、類型・類想感を感じて採らなかつた。

花八ツ手きらりと母の糸切歯 悦子

佇まいがいいと思っが「きらり」がひっかつた。

大島：花八ツ手と母の裁縫は似合っているが「きらり」はどうかな。

女性：糸噛んだんちがいます？金歯ですかね。

大島：それでは面白くない(笑)。

色白は要注意なり毒茸 弥生

女性のことかなあと思っ読んで

いったら突然「毒茸」が出てきて、あつと驚かせる。なかなかの面白さ。

大島：一見美味しそうだが色白は気を付けなさいよ、と茸の説明をされたような感じ。

籐椅子に父の煙管の匂ひあり 直水

煙管の匂いでお父さんを偲ばれていることが出ている。

大島：籐椅子と父の匂いはいいと思うが、籐椅子は夏の季語。間もなく冬だという時期にいかがなものかと思う

し、煙管はいつの時代の父？(笑)今は落語でしか出てこない。葉巻だったらまだわかるが。

買ひ足しの一円切手神の留守 あゆみ

10月からハガキが1円上がって63円に。1円切手また貼らないかんのかと。神の留守だから隙をつかれたなとそんな感覚。

大島：数年前に葉書が上がった時に、2円切手を貼った。それと同じやと思っ

て。

エイトビート聴きつつ外は秋の雨 石亭

外は明るいほうがエイトビートは似合うと思っが、「秋の雨」と逆に言ったところが面白い。

大島：「外は」は特にいらぬ。室内で聴いていて、外を見たらいつの間にか秋の雨、目線の動きは感じるが。

採血の脈の浮き出す神の留守 英典

林檎挽ぐ風に傷みしもの踏んで 雄作

銀河濃し人は地面に線引いて 清吾

死にたがる老人ばかり今年酒 三江子

雑巾を罰する如く振り冬 すずめ

やはらかく年を取りたし龍の玉 雄作

展開図のやうに蟻螂水に浮くとしたか

冬帽子心壊れし人に添ふ 千恵子

木犀の香りの壺となりし村 千恵子

雀斑の濃くなる夕べ木の実降る 朱夏

冬めくや匂ひ袋の香の切れて 英典

★文字にすると、きつく感じるかもしれないが、現場は関西弁が縦横無尽に飛び交う終始和やかなムード。大島代表のぶつきらぼうのようについて、言語明瞭かつ的確で愛ある指導は、簡にして要を得ている。その証拠に、メンバーの一人がこの度第34回「俳壇賞」の受賞が決定し、聞けば「青垣」からは4人目とのこと。以前、大島代表が間に立ってくださり会員の句集をお手伝いした際は、きれいな原稿で訂正は全くなし。緻密で、過不足がない。上達したい方にはぜひお勧めしたい会だ。(木戸敦子)



▲通信句会2つを含めた7句会すべてを代表が指導

# 小西瞬夏様

## 『句集 一对』

(岡山県・岡山市)

本年10月、第二句集『一对』を上梓した小西瞬夏さんにお話をお聞きしました。

### Q ようやくの上梓ですね

解説をお願いした方がご苦労されたようで「今回の句集は一筋縄ではいかなかった」と、原稿が固まってから一年半待ちました。句をわかるように、納得させるようにどう解説を書くか、本当に難しかったと。乗り放題の切符と私の原稿を持って、何回も電車でぐるぐるしたと言っていましたから(笑)。

### Q 俳句がわかりにくいということ?

作品が大きいですよ?それが個性でもあります、少し作り込み過ぎというか、脱皮しなきゃいけない時期だと。句集を見返して余計に感じます。そのままを映した方がもっと深くなる



▲第1回「海原賞」(『海程』後継誌)を受賞した著者。

のに、屈折させたり重ねたりするのが好きで。

### Q その原点はどこ?

学校で俳句を習った時も古臭いし、ぴんとこなくて嫌だった。でも、なぜか高校の時、古本屋で山頭火句集を買ったんです。「うしろすがたのしぐれてゆくか」とか「どうしようもないわたしが歩いてゐる」とか、俳句だと思わなくて短い詩はかっこいいなあと。親の転勤が多く高校は一人で福岡の寮に残ったので、結構好き勝手にできまして送りも本や映画に使っていた(笑)。

結婚して岡山に来てからは、映画好きが高じて「岡山映画祭」に携わることに。集まってくる人たちが面白くて、毎月、ゲストを囲んで食事をする会を催していた。句集の解説を書いていた方もその時のお一人で、その後に来たのが俳人の方。せっかくだからと句会をしたのが最初で、その時、俳句って普通の言葉でいいんだ、と。短くて早く勝負がつくから性にあってる気もした。それが35歳のとき。

### Q それからは一気に俳句へ?

当時は、3人の息子の一番下が5歳の頃。でも句会以来、自分のなかにあった何かがむくむくと(笑)。言いたいことを言い、書きたいことを書くようになったが、次第に俳句はそんな甘いものじゃないと気づいて。ちょうど信頼している方に「結社に入って勉強した方がいい」と言われ「海程」に入会したのが49歳の時。

句会もその後の飲み会も楽しいし、



▲漆黒のカバーには、一对の文字が箔押しで。地模様は特色銀。カバーの下にひそむ表紙は深い赤色。『句集 一对』はAmazonで購入可能です

賞に入った褒められればうれしい。でも51歳で第一句集『めくる』を出して、こうありたいという自分の生き方や思想が俳句と一致したら、俳句を作ることが表面的なことや、言葉遊びじゃなくなった。それまではゴテゴテさせたり作り込んだりするのが好きだったから、そうではなくシンプルな言葉で、飾らずに…と、どんなはまっていった。

第一句集以降の5年間のものなので、途中から、より精神的になってきて前半と後半では大分雰囲気が変わると思う。その辺りが見えるよう、あえて時系列で並べている。ちょうど御社から選句サービスの案内が届き、第三者の視点も欲しいと思っていたのでいい機会だった。句集を出すことで、変化したこと、変な癖も、次の課題も見えてくる。ここで一度整理して、次のステージに向けて修行が始まっていくというか。

### Q その過程がこの度の『句集 一对』に?

求道者みたいですね  
今までやってきたことが全部俳句に

集約されている感じはする。俳句ってちょっとずつハマるんですよ(笑)。自分が見えて課題が出てきて、いくらやってもこれ!って納得できるところまでいかない。「降り始める雪」と「雪降り始める」じゃ全然違うし、やってもやっても完成しない。34歳までは俳句が私の人生に出てくるなんて思ってもみなかったのに不思議。なんでこんなに好きなのかなあって。

### Q でも楽しいわけですね?

たの苦しい(笑)。楽しいだけは駄目なんです。負荷があつてステップアップ、深化が感じられることにしか興味がないみたいです。もっと楽しくやればいいのに損な性分です。

### 『句集 一对』より

春寒のあの黒猫を抱きなさい

だれも見えてゐない雛になります

髪梳けばどこかで雪の崩る音

少年の唇月光の匂ひせむ

おほかみの面影として手鞠唄

★午前は夫の会社の経理、午後はご自身が主宰する学習塾、そして嫁の務めと、おおらかに三足の草鞋を履きなさい、寸暇を惜しんで俳句に没入する。数年前には同じく俳句好きの友人と、朝7時に運動公園に集まって30分吟行、10句作って、近くで朝食をとりながら30分句会してから仕事に行くというのを週一でやっていたとか。生きることを俳句が同義。「たの苦しい」ってすごくいい。(木戸敦子)

※誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、  
先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、243でした。  
※しめきり 2019年1月15日(水)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。



## 投稿作品

### 俳句

- 1 鯛雲五分遅れのバスの影  
若井令子(兵庫県)
- 2 人間は人間なんだ十二月八日  
福岡 悟(東京都)
- 3 柿紅葉散り重なりて鯉の宿  
三津木俊幸(千葉県)
- 4 仁王立ち螭螂向ふ相手猫  
青木凉子(埼玉県)
- 5 近道を帰りし証草虱  
平山千重子(岩手県)
- 6 台風の日哀しみ残し言葉無し  
塩崎須美子(神奈川県)
- 7 用水に沿ひ農道の彼岸花  
津布久信雄(東京都)
- 8 秋なかば父母のこと思ひ出す  
松嶋光秋(東京都)
- 9 田の面這ふ行雲の影冬に入る  
大谷 茂(埼玉県)
- 10 芒原出口を探す友の声  
堅田秀子(東京都)
- 11 夏瘦とわかる手首の腕時計  
山崎吉晴(群馬県)
- 12 絶縁の友から栗や詫び状と  
松尾らん(東京都)
- 13 金木犀螺鈿古りたるたたずまひ  
小島岳青(新潟県)
- 14 白寿の師の訃報に接し秋深し  
井原毬子(東京都)
- 15 秘やかに庭の一隅杜鵑草  
道給一恵(埼玉県)
- 16 止まり木に煙草の匂ひ冬立ちぬ  
環 順子(東京都)
- 17 星の数増えて晩夏のタワービル  
高崎登喜子(東京都)
- 18 栗林かすかに薫る道すがら  
田中恵美子(山形県)
- 19 高砂や両家寿新酒酌む  
天野輝子(東京都)
- 20 枯芙蓉生きるしるしのほてりかな  
片山茂子(埼玉県)
- 21 新酒酌みほろ酔ひ気味の神楽坂  
古谷 力(東京都)
- 22 足るを知る米寿となりて枯芙蓉  
内河邦久(東京都)
- 23 明日へと親指程の隼人瓜  
溝畑美代子(埼玉県)
- 24 少年の目が輝きて木の実落つ  
村田吉雄(東京都)
- 25 黒板にモーニングコーヒー今朝の秋  
居原田暹(大阪府)
- 26 一等賞くわえたパンの甘さかな  
湯浅暉子(石川県)
- 27 シャンパンに溶けし聖樹の明かりかな  
すずき笑子(東京都)
- 28 赤い葉を浮べて鯉の就く眠り  
磯部 力(新潟県)
- 29 ふくべより注がるる銘酒後の月  
川口 襄(埼玉県)
- 30 空碧しココア色づき人寄せて  
西條公雄(埼玉県)
- 31 螭螂のダンスのような怒りかな  
井上静夫(栃木県)
- 32 台風去つて又台風地球は泣いている  
白松いちろう(千葉県)
- 33 神仏に台風被害無きを謝す  
齋藤光雄(新潟県)
- 34 咲きおくれむくげ開けり今朝の雨  
檜山柚子香(東京都)
- 35 青空に輪かく鳶や村祭  
間森 坦(兵庫県)
- 36 炎天下芝苺おえてビール飲む  
原田治男(東京都)
- 37 波寄する湖面に釣瓶落しかな  
小澤円梨(静岡県)
- 38 庭先の舞ひ転げをり柿落葉  
杉原明子(静岡県)
- 39 戦なき世に永らえて星月夜  
堀木和子(大阪府)
- 40 鐘撞くも一会の一つ枯槎寺  
佐野和彦(静岡県)
- 41 古書店はパリの匂ひや細雪  
島村幸重(兵庫県)
- 42 一葉ごと風に吹かれて落葉かな  
中嶋清子(佐賀県)
- 43 大出水群たる魚影遺したり  
中村康浩(福岡県)
- 44 茶立虫妣のへそくり未だ出ず  
吉里ひとみ(東京都)
- 45 初雪に湧くときめきも若さかな  
有坂馨園(福島県)
- 46 落葉焚き昭和生まれがまだ主役  
寺内 佶(埼玉県)
- 47 好きな人老いても美人秋ざくら  
清まさじ(静岡県)
- 48 全容のマッターホルン冬日和  
高野ほづ子(千葉県)
- 49 白露の夜余生さばさばシヨパン聴く  
上村元義(神奈川県)
- 50 味噌作り小柄な姉の大仕事  
小林七重(新潟県)
- 51 朝ぼらけ静かに消える秋の月  
阿部徳夫(宮城県)
- 52 七五三神主のぐち夜更ける  
白戸麻奈(東京都)
- 53 菊を食む一年を食む今を食む  
多田文代(東京都)
- 54 輪に入りて札所めぐりや男郎花  
宮崎敏昭(埼玉県)
- 55 仏壇へおろしも添えし初秋刀魚  
井田由利子(宮城県)
- 56 被災地へ神も仏もなき秋雨  
大阿久雅子(埼玉県)
- 57 秋空や模擬店の旗ひらひらと  
中島光江(埼玉県)
- 58 大花野見て今生や喜寿となる  
星 一子(神奈川県)
- 59 着ぶくれて濁世に遠く住みにけり  
青木ケン子(埼玉県)
- 60 五合庵紅葉ひとひら恋の文  
小田ゆかり(新潟県)
- 61 背もたれの椅子にやすらぐ菊日和  
中田文子(大阪府)
- 62 風紋の変はる砂丘や鳥渡る  
田中 昶(鳥取県)
- 63 むかご飯ほくりと食みて母はなし  
高松玲子(埼玉県)
- 64 冬霧まとふ神殿の太柱  
橋本良子(埼玉県)
- 65 秋富士や大吉望む吊し雲  
神 一男(静岡県)
- 66 母がりに母より継ぎし茸飯  
関山恵一(神奈川県)



- 67 八重菊や令和天皇即位の儀  
梶 鴻風(北海道)
- 68 倒影の山に乗りたる鴨の陣  
津田卿雲(岡山県)
- 69 莊嚴に天宇を包む秋夕焼  
大窪美代子(大阪府)
- 70 長き夜の寝しなに唄ふおけさ節  
松尾憲勝(神奈川県)
- 71 大つぶの雨がまた来て彼岸花  
福山三智子(東京都)
- 72 秋十年道のかるみと太極拳  
光成高志(千葉県)
- 73 紺色のスーツに似合ふ赤い羽根  
平林義康(兵庫県)
- 74 洪柿の熟すほど知る老の価値  
岩田 信(神奈川県)
- 75 吾が影も暑さを背負ひ田草取る  
井上氣海(広島県)
- 76 つまづいた段差のほどに秋の暮  
杉村美保子(岩手県)
- 77 赤い羽根議員の胸のそらぞらし  
北野耕兵(千葉県)
- 78 ご無沙汰は百も承知で賀状書く  
長峰正晴(千葉県)
- 79 ひと夜にて素直になりし懸大根  
近藤ともひろ(千葉県)
- 80 秋草を束ね小さき野仏に  
鈴木清子(埼玉県)
- 81 大根引き引いたもの手で貰いけり  
吉村充治(埼玉県)
- 82 長き夜の句会みな顔美しき  
湯浅芳郎(岡山県)
- 83 熟柿のサルが喜びカニに分け  
齊藤安弘(神奈川県)
- 84 脳トレの脳に風吹く秋の暮  
川嶋法子(東京都)
- 85 過去未来乾いた落葉にペダル踏む  
若月理依子(新潟県)
- 86 木せいこの香にさそわれし散歩道  
田村よし(茨城県)
- 87 来し友と秋の夕暮れ惜しむかな  
藤井春三(埼玉県)
- 88 ふたつの世行きつ戻りつ林住期  
萬濃その子(神奈川県)
- 89 菊を抱き菊に抱かれて兄は逝く  
岩崎弘舟(岡山県)
- 90 病とは闘ふ相手小鳥来る  
桜井葉子(千葉県)
- 91 千曲川遊子も悲し颯風禍  
中山日出子(大阪府)
- 92 墨匂ふ海の深みや秋ともし  
貝瀬光洋(神奈川県)
- 93 まだ生きる積りの補聴器秋高し  
日名子春実(群馬県)
- 94 年輪の土産のこして木の葉舞う  
鏡たか子(山形県)
- 95 銀杏のはせて翡の色映えし  
中尾直美(大阪府)
- 96 すさまじや七万年の湖底編  
伊藤 修(埼玉県)
- 97 白髪の子ほんのりと紅葉酒  
渥美 保(滋賀県)
- 98 時くれば母恋ふ日なり曼珠沙華  
竹本美美子(新潟県)
- 99 火山灰降るや空家の庭の木守柿  
坪田勝秀(鹿児島県)
- 100 台風に直角にぶつかりバラバラに  
浅海和代(神奈川県)
- 101 賀状書けることの幸せ枇杷の花  
村山徳英(埼玉県)
- 102 小鳥来るベンチに鶴を折る母子  
一瀬正子(埼玉県)
- 103 即位礼を言祝ぐがごと虹の橋  
山田富朗(埼玉県)
- 104 天の川ナブキンほどの日本海  
今井勝子(新潟県)
- 105 落ち葉踏み滑らぬように駅に行く  
宇田川正雄(埼玉県)
- 106 すぐそこに見えて届かぬ通草笑む  
重原爽美(新潟県)
- 107 池の面に三ヶ月映し秋の風  
長谷部喜代子(大阪府)
- 108 身構えてつくる迷句や柿紅葉  
中川義彦(新潟県)
- 109 新涼や貝塚抱く子持菌傘  
中野勝子(鹿児島県)
- 110 実の一つ落ちて気を引く山法師  
宇都木安子(東京都)
- 111 吊り橋の鬼怒川渡冬時雨  
沖 惇子(大阪府)
- 112 薄れゆく絆もありぬ鱚雲  
橋本 絢(東京都)
- 113 菊の香に一日の幸を沈む陽に  
木村 舩(山形県)
- 114 久々に振り廻したる蠅叩き  
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 115 猿のごと柿挽ぐ夫や喜寿を過ぎ  
清水君江(埼玉県)
- 116 潮風と土の匂いや大根引き  
松前邦広(千葉県)
- 117 酒蔵の大き梁冬に入る  
本庄準也(埼玉県)
- 118 赤トンボ飛び交う農道又歩く  
大野寿子(大阪府)
- 119 弓張りの月射んとすやヘラクレス  
小泉芝雲(千葉県)
- 120 駒ひいて祭太鼓や花木植  
齋藤博洋(秋田県)
- 121 落ちてなお木の実いっぱいいる仲間  
望月謙一(東京都)
- 122 立冬の空へ字を書く大きな字  
安田芳江(茨城県)
- 123 水平線割りて朝日の秋の浜  
永田歌子(埼玉県)
- 124 絵手紙のとどく週明け文化の日  
若林卓宣(三重県)
- 125 祝ふがにコスモスゆれて孫の婚  
本間ミネ(新潟県)
- 126 ただそばにつきそふ介護春うらら  
本間 進(新潟県)
- 127 亡き姑におせちの評価さいてみる  
中村ノブ子(東京都)
- 128 のんびりと暮らすしあわせ秋の雲  
高垣勝代(大阪府)
- 129 以上でも以下でもなくて竹の春  
早乙女文子(埼玉県)
- 130 師は天へ七夕句会始まりぬ  
増田公代(東京都)
- 131 筋骨のバネの緩みし小春かな  
椋本望生(大阪府)
- 132 和服を着て子の成長七五三  
五味田幸夫(東京都)
- 133 赤い羽根つけて意気揚揚と吾子  
浦橋渴雪(兵庫県)



# 短歌

- 134 年詫びながら終いの栖へ連れて行く  
車椅子の夫の背中押す  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 135 野あそびの知恵おそき子ら怖ず怖  
ずと仔牛に手触れ瞳かがやく  
黒澤正行(福島県)
- 136 本能が理性をはるかに上回り弱肉  
強食いまま変らず  
阿部 至(埼玉県)
- 137 殺処分される命の痛ましき鶏イン  
フルに豚コレラまでも  
桑原謙一(群馬県)
- 138 大野分け守宮の親子どこにすむ戸  
袋の中に見つけて安堵する  
青木日出男(群馬県)
- 139 十月の声ききたれば坪庭の金木せ  
いよ咲きいるおどろき  
高須 孝(愛知県)
- 140 川湯にて三十八の喜寿の顔眠れぬ  
ままにふるさとに在り  
早坂紘司(北海道)
- 141 杖なしで歩ける事を幸として硬き  
舗道に背筋を伸ばす  
野木宗信(奈良県)
- 142 老いし母に感謝の気持ちの文を書  
く今あることの喜び綴りて  
森 由恵(奈良県)
- 143 ものわすれ多くなれども毎日の家  
事に気づくばりまめにこなして  
高橋登志子(新潟県)
- 144 冬櫛せみも葉もなき舗道とてイル  
ミネーションたらすおきなが  
安部 哲(新潟県)
- 145 警報のエリアメールの鳴り響く氾濫  
なきを切に願いぬ  
関原幸子(東京都)
- 146 風にのり亡母の呼ぶ声聞こえくる  
元気ですごせと温き声  
渡部美代子(山形県)
- 147 百歳を生きし伊丹氏昇天し黄泉で  
も活躍「フォト一句」  
阿部澄江(宮城県)
- 148 雨上り久しい陽射し眩しみて散歩  
の夫と木陰で憩う  
田中豊恵(新潟県)
- 149 もろともに玉と磨きて傘寿むかう  
も声は変わらぬ高三のまま  
土屋喜雄(山梨県)
- 150 橋脚に草木おどらせ水流は太き渦  
まき塊となる  
石尾曠師朗(東京都)
- 151 さくらより先に散る花ありて春逝  
くもさみしと媪は語る  
寒川靖子(香川県)
- 152 食べないと心配しては食べさせて  
大きく育つ預かり犬よ  
大橋絵代(千葉県)
- 153 人の声のみ拾い上ぐ補聴器を發明  
してくれ老人のため  
久本にい地(岡山県)
- 154 台風避難勧告市営棟市民救済市  
議の吾子  
峯岸信子(東京都)
- 155 師走の日母に抱かれ世を去った父  
はわたしの中に生きいる  
合田浩子(茨城県)
- 156 八十路すぎ気は若いけど現実の日  
を向けたれば七人の曾孫  
西山知子(岡山県)
- 157 もう一度肩に毛布をかけなおし義  
母の寝息をたしかめて寝む  
相馬 純(新潟県)
- 158 美しき詩の生れし千曲川壊れし河  
川に叫ぶ悲歌  
坂元正憲(東京都)
- 159 白神のつくばね招く右左枝を見つ  
けて奥へ奥へと  
大鳥居牧子(東京都)
- 160 秋の日の光りの中にくつきりと爽  
竹桃は白く輝く  
中澤敬子(千葉県)
- 161 山の宿夜来の雨に洗はれて四圍の  
緑の清しき朝明け  
夏井寛治(新潟県)
- 162 首里の城燃ゆるニュースにしがみ  
つき五色の宝消ゆるを嘆く  
守安幹男(岡山県)
- 163 露天の湯山影映しひそやかに白き  
さざん花散り始む故郷  
内藤明子(東京都)
- 164 土砂降りの中自転車の高校生ずぶ  
濡れのまま走り去りゆく  
早坂保文(宮城県)
- 165 即位礼永遠にわたりて弥栄を令和  
の御世に祝う幸せ  
岩崎令子(大阪府)
- 166 政府に誘導されし選者たち吾なら  
きつと万和を選ぶ  
中村万年青(京都府)
- 167 押入れの火鉢に母の声がする  
木村洋一(新潟県)
- 168 古稀を過ぎ老後が今とは知らなんだ  
和崎治人(山口県)
- 169 終りまで荷物を背負い道を行く  
守屋高雄(岩手県)
- 170 安眠か死もこの様に行くときよ  
原 崇雄(埼玉県)
- 171 かたつむり飼つてをるなり耳の奥  
岩村 昇(神奈川県)
- 172 紛らわしい番地三の一二なの  
丸山芳夫(東京都)
- 173 ゆつたりと老後過ごせる国であれ  
細川光子(栃木県)
- 174 大好きな我が街まさかラスベガス?!  
古閑智子(神奈川県)
- 175 明日がある明日のない日もきつとく  
る  
小山恵美子(大阪府)
- 176 宝石のような川柳との出会い  
目黒豊光(福島県)
- 177 台風が爪痕残し走り去る  
久保壽雄(北海道)
- 178 合着など無用ブラウス皺だらけ  
佐伯セツ子(香川県)
- 179 泥の河嘆き申い立ちあがる  
奥那於子(大阪府)
- 180 男ひとり淋しさに耐えクラス会長  
谷川庄二郎(千葉県)
- 181 関電は金を握って感電し  
橋本世紀男(東京都)
- 182 人生の寄り道が花万歩計  
近藤富夫(東京都)
- 183 亡き母の歌が聞える里の川  
鈴木義雄(福島県)
- 184 藁塚や子供の頃に良く遊び  
濱田イサオ(福岡県)
- 185 わが姉と昔の姫路なつかしむ  
松島章子(兵庫県)



フォトイック

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：伊丹三樹彦さん)

- 196 老いの谷へ落ちないように恋をする  
小山恵美子(大阪府)
- 195 よしてよキスなんてウフフマイ・  
ダーリン  
居原田暹(大阪府)
- 194 鴛鴦の夫婦のごとき余生かな  
片山茂子(埼玉県)
- 193 冬めくや部屋には二人アイラブユー  
天野輝子(東京都)
- 192 老いてなほハグは烈しき異人さん  
高崎登喜子(東京都)
- 191 秋の暮見たくないもの見てしまふ  
井原毬子(東京都)
- 190 敬老日介護の母を抱く息子  
山崎吉晴(群馬県)
- 189 忠太郎じゃないけど母さんにやっと  
会えたよ！  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 188 秋うらら日当ぼつこの母にキッス  
平山千重子(岩手県)
- 187 恋よりも愛にすべてを雪月花  
福岡 悟(東京都)
- 186 お久しぶりお元気でしたか好きで  
すよ  
和崎治人(山口県)
- 197 キャデラック買ってくれろと言う夫  
青木日出男(群馬県)
- 198 老いてなほ男と女秋の夜  
齋藤光雄(新潟県)
- 199 人前に出せぬ姿やこの二人  
檜山柚子香(東京都)
- 200 おたがひの愛確かなる小春かな  
小澤円梨(静岡県)
- 201 マイダーリンマイダーリンや北風の  
夜  
寺内 侖(埼玉県)
- 202 おおらかに夫婦の愛を表現す  
高橋登志子(新潟県)
- 203 遺言は抱擁われに或る悪縁  
安部 哲(新潟県)
- 204 小春日やラブラブ夫婦羨まし  
関原幸子(東京都)
- 205 おつとととラブラブ二人いいかんじ  
渡部美代子(山形県)
- 206 お母さん生んでくれてありがとう  
阿部徳夫(宮城県)
- 207 アイ・ラブ・ユー僕から君へのプロ  
ポーズ  
阿部澄江(宮城県)
- 208 暖かや母をハグこそ世界一  
有田裕子(北海道)
- 209 へべれけは嫌いなんです臭いから  
田中豊恵(新潟県)
- 210 秋彼岸ついに夫人と再会す  
井田由利子(宮城県)
- 211 百までかヨイトコドッコイぼちぼち  
な  
佐伯セツ子(香川県)
- 212 ダーリンに抱きすくめられ冬めくし  
大阿久雅子(埼玉県)
- 213 台風一過今日も明日も大好きだよ  
星 一子(神奈川県)
- 214 ラブピース好きな気持ちは赤児並  
奥那於子(大阪府)
- 215 強引な愛に戸惑い隠せない  
長谷川庄二郎(千葉県)
- 216 おばはんもいやよいやよは好きの  
うち  
橋本世紀男(東京都)
- 217 愛されてゐても心は唐辛子  
橋本良子(埼玉県)
- 218 奥さんが迷惑がつてるこの抱擁  
神 一男(静岡県)
- 219 あの時のキスよみがへる秋の虹  
梶 鴻風(北海道)
- 220 抱きしめる人なきくらし曼珠沙華  
大窪美代子(大阪府)
- 221 このハグを真似したくなし暮の秋  
光成高志(千葉県)
- 222 幸せは老いて共助のできる仲  
久本にい地(岡山県)
- 223 うれしさもさらにもまします君ならば  
長峰正晴(千葉県)
- 224 イヴの夜はこの夜人の夜妻愛し  
近藤ともひろ(千葉県)
- 225 抱擁はやさしくしてね星月夜  
鈴木清子(埼玉県)
- 226 おじおばの柿桃好み恋もする  
齊藤安弘(神奈川県)
- 227 あら！私の胸もドーキドキ  
川嶋法子(東京都)
- 228 お父さん厭厭も好きさなうち  
合田浩子(茨城県)
- 229 介抱の老のいたわり衣替え  
藤井春三(埼玉県)
- 230 はずかしい皆が見てるよお父さん  
岩崎弘舟(岡山県)
- 231 老いたれど愛は永遠続きたり  
西山知子(岡山県)
- 232 愛してるイヤンホホホうれしいわ  
鏡たか子(山形県)
- 233 ほ、と胸貴方の重さぬくもりて  
大鳥居牧子(東京都)
- 234 人生の至福を妻と永久の春  
村山徳英(埼玉県)
- 235 おじいちゃん孫の手前よもう止めて  
守安幹男(岡山県)
- 236 何時迄もいつまでも好き文化の日  
中野勝子(鹿児島県)
- 237 熟年のはげしき恋に晩夏かな  
宇都木安子(東京都)
- 238 やめてよオアナタッたらアはずかし  
い  
仁藤ひろし(埼玉県)
- 239 いつまでも愛を伝える古日記  
本庄準也(埼玉県)
- 240 愛しさではち切れそうな老夫婦  
安田芳江(茨城県)
- 241 うれしさに思はず二人の絆かな  
本間 進(新潟県)
- 242 遅かった待ちくたびれてまずはハグ  
岩崎令子(大阪府)
- 243 やつと許せる齢となりて良夜なり  
早乙女文子(埼玉県)

俳句・川柳募集!!

右の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にてお待ちしております！

(写真提供：伊丹三樹彦さん)





◎短歌部門

18 武器を売る大統領についてゆく我が  
リーダーに怒りのこぶし

合田浩子(茨城県)

・武器を売るのは本気だが、温暖化には見向きもしない、それでいてノーベル平和賞はほしいという、あきれれる黒澤正行(福島県)・怒っても通じないが人格的に最低の首相です 早坂絃司(北海道)・人が人をあやめる武器軍事費ばかりがのびてゆく 北野耕兵(千葉県)・全く同感、トランプのポチのような我が首相に不安が募ります 坂元正憲(東京都)

27 虐待を受け亡くなりし五歳児の書き  
遺したる言葉胸刺す

早坂保文(宮城県)

・本当に悲しい。父親に実刑の判決が下されたが短いと思う。どんなに絶望した五歳の女の子 濱崎祥子(鹿児島県)・新聞、テレビ等で見聴きするたび、淋しく、哀しい気持ちになる 高橋登志子(新潟県)・幼女の「許して下さい」の文胸を打つ。悲痛の声だ、助けてあげたい。父よ猛省を 田中昶(鳥取県)・自分の子供を亡くなるまでの虐待は親になる資格は無し。子供さんはどんなにつらかったであろうか 峯岸信子(東京都)・記事や報道をみて、私も同じ気持ちになりました 鈴木義雄(福島県)・たった五才の児に可哀相に思いました 西山知子(岡山県)・繰り返し返される悲劇に何も出来ないむなしさを痛感しています 岩崎令子(大阪府)ほか

◎川柳部門

29 年を取るって初めてで難しい

丸山芳夫(東京都)

・生きるのは、老若とわず難しい 原崇雄(埼玉県)・極めて共感 大久保白村(東京都)・感じ方・体調等は人それぞれ。これもあれも老化かしらと悩みます 奥那於子(大阪府)・私事ですが70代から80代へうつる年令になってきたので感じます 松尾正一(岩手県)・同感です。しかも川柳らしい作品で文句なし 萬濃その子(神奈川県)・川柳ならではの述懐、前向きな年のとり方 貝瀬光洋(神奈川県)・未経験の高齢社会、健康の事、家族との折り合い、経済面、巧くゆくよう心配りが大切 守安幹男(岡山県)・視点を変えれば人生楽しいことばかり 橋本絢(東京都)

31 他人事ひとことと思うなペダル踏み違え

細川光子(栃木県)

・とかく他人事ひとことと思ってる事が多い中、今回の台風19号の大被害、心が痛み一日も早く復興されることを祈ってます 和崎治人(山口県)・すべのドライバーにその危険性ありで気を付けなければと思います 久保壽雄(北海道)・どこに行くにも今も自転車を利用しています。改めて気をつけようと思います 杉村美保子(岩手県)

◎俳句部門

75 噛み砕き農夫頷く今年米

吉村充治(埼玉県)

・実感が籠っています 有坂馨園(福島県)・異常気象にもかわらわず今年も収穫出来た喜びが伝わって来ます

井田由利子(宮城県)・今年収穫したお米も納得いく出来栄えだったのでしよう 大阿久雅子(埼玉県)・丹誠こめて種を播き苗を植え、秋の収穫、粒を噛んで納得している姿が素晴らしい俳句と感心しました 津田卿雲(岡山県)・我が家も少しではありますが米作りをしておりますので、噛み砕きの表現に共感致しました 清水君江(埼玉県)・お米の出来具合が良かった様子こちらもうれしくなりました 安田芳江(茨城県)

149 生家には今も卓袱台衣被

一瀬正子(埼玉県)

・足折り便利な丸い卓袱台、故郷のなつかしい思い出が甦って来ました 青木凉子(埼玉県)・卓袱台が懐かしい。昭和も思い出す 居原田暹(大阪府)・故郷を出てもはや五十五年だ。卓袱台で食べた衣被が懐かしい 井上静夫(栃木県)・生家のある人うらやましいです。もう遠い遠い日となりました 大窪美代子(大阪府)・旧家のしつらいが良く見えてきます。衣被の季語のよろしさ 松尾憲勝(神奈川県)・生家にも卓袱台があり、衣被が置かれてるのが懐かしい 浅海和代(神奈川県)・卓袱台を囲んで衣被を食する昭和を思い出す。なつかしい 永田歌子(埼玉県)

◎フォトイック

今回大賞はありませんでした。



◎他にも

1 朝まだきゆつたりゆつたり美しく浩然の気や太極拳は 阿部 至(埼玉県)

4 様ざまな人間模様見せながら診察を待つ廊は混み合う 中沢敬子(千葉県)

7 「核兵器禁止条約」に不賛成被爆国日本の政治を憂う 黒澤正行(福島県)

40 スリ注意スリも見ている揭示板 二瓶邦枝(埼玉県)

43 戦争はダメよダメダメ理屈ぬき 近藤富夫(東京都)

44 今日も乗る走る凶器という愛車 目黒豊光(福島県)

51 青鷲の黙考水の黄昏れて 環 順子(東京都)

57 白寿まで生きる夢あり星の夜 齋藤光雄(新潟県)

65 梅を干す夜はことさら匂ひけり 平山千江(岩手県)

82 秋刀魚焼く匂ひ動かぬ裏小路 小林七重(新潟県)

132 ひとつ覚えひとつ忘れて猫じゃらし 早乙女文子(埼玉県)

147 新米と言ふあたらしきいのち食ふ 若林卓宣(三重県)

188 だべりついに足止まりたり松の花 安部 哲(新潟県)

193 バックシャン言葉なつかし秋祭り 橋本世紀男(東京都)

206 見返り美人どんなお顔か見てみたい 阿部徳夫(宮城県)

※ 今後もふるってご投稿をお願いいたします！



Q 前回のアンケート  
おせちで好きな料理は  
何ですか？

● きんとん

栗きんとん

清まさじ(静岡県)

若井令子(兵庫県)

川嶋法子(東京都)

ほか多数

栗きんとんが大好き

松嶋光秋(東京都)

道給一恵(埼玉県)

一番先に食べてしまう

野木宗信(奈良県)

絶対栗きんとん。半製品を利用して  
手作りです

大阿久雅子(埼玉県)

甘味大好き

神 一男(静岡県)

できれば亡き祖母の味をもう一度

大橋絵代(千葉県)

ずばり正当栗きんとん

北野耕兵(千葉県)

嫁ぎ先の母の直伝で長女の作る栗き  
んとん(正月持参)

本庄準也(埼玉県)

芋きんとんの甘さが好き

濱崎祥子(鹿児島県)

● 数の子

数の子

大久保白村(東京都)

堀木和子(大阪府)

土屋喜雄(山梨県)

ほか多数

数の子にカツオブシと青海苔をかけ  
て!

塩崎須美子(神奈川県)

一番好きなのは数の子

井原毬子(東京都)

食感がたまらなく好き

かずノコで一杯

稲葉民雄(千葉県)

歯ごたえとお酒のつまみとして最高

数の子…これが全て!

仁藤ひろじ(埼玉県)

数の子、黄色でツブツブなのがめで  
たい感じ

中村万年青(京都府)

津布久信雄(東京都)

小田ゆかり(新潟県)

中村ノブ子(東京都)

妻の実家の母親が作ってくれる昆布  
まきは天下一品だった

井上静夫(栃木県)

昆布巻。鯀との取り合わせが最良

有坂馨園(福島県)

サケやアユを巻いた昆布巻。母がよ  
く美味しく作ってくれました

関原幸子(東京都)

昆布まき(味噌煮)

上村元義(神奈川県)

鮭の昆布巻。中骨までやわらかく食  
べられるようなのが大好物

若月理依子(新潟県)

ニシンのこぶ巻き(手作りします)

大鳥居牧子(東京都)

身欠きニシンを巻いた昆布巻き、や  
わらかく味のしみたもの

早乙女文子(埼玉県)

● 豆

黒豆

内河邦久(東京都)

早坂紘司(北海道)

中嶋清子(佐賀県)

ほか多数

丹波の黒豆(し)を買って自分で煮  
ます

小山恵美子(大阪府)

母が作ってくれた、少し歯応えのあ  
る豆の味のしつかりした黒豆

森 由恵(奈良県)

何年も何十年も変わらず続かしわし  
わの黒豆

目黒豊光(福島県)

家の子ども達は家で煮たお豆しか食  
べません

星 一子(神奈川県)

黒豆です。一粒一粒味わいあのか  
が口に広がる時は最高

井上氣海(広島県)

ほんのり甘く煮付めた黒豆

中川義彦(新潟県)

豆全般、特にしたし豆

三津木俊幸(千葉県)

煮豆

日名子春実(群馬県)

紅白かまぼこ。祖母に段々切りを教  
わり、同じように出来た小四の想い  
出

松尾らん(東京都)

紀文のカマボコ。一年に一回最上品  
を選んでいきます

青木日出男(群馬県)

西相模生まれだもの、もちろん「蒲  
鉾」

吉里ひとみ(東京都)

紅白のかまぼこと伊達巻の黄色

齊藤安弘(神奈川県)

かまぼこ、いくらでも食べてしま  
います

伊達巻

小澤円梨(静岡県)

島村幸重(兵庫県)

青木ケン子(埼玉県)

ほか多数

伊達巻き(手作り)

高野ほづ子(千葉県)

しつとり感と甘さがたまらない

有島和子(東京都)

ナマス

小島岳青(新潟県)

「大根なます」シャキシャキ感がた  
まらない

環 順子(東京都)

紅白なます

湯浅暉子(石川県)

普段余り口にしないので食べる  
正月を感じます

原田治男(東京都)

紅白なます。もちとかおせちを食  
べたあとさっぱりしていい

長峰正晴(千葉県)

よく切れない包丁で細く大根や人  
参を刻んでいた母を思い出す

貝瀬光洋(神奈川県)

お煮しめ

細川光子(栃木県)

高崎登喜子(東京都)

井田由利子(宮城県)

ほか多数

野菜の煮物…母の味

堅田秀子(東京都)

れんこん、ごぼう、こんにゃく等、  
日常手に入る食品だが昔々の親達  
の味の再現むつかしい

松島章子(兵庫県)

煮物

お煮しめ

細川光子(栃木県)

高崎登喜子(東京都)

井田由利子(宮城県)

ほか多数

野菜の煮物…母の味

堅田秀子(東京都)

れんこん、ごぼう、こんにゃく等、  
日常手に入る食品だが昔々の親達  
の味の再現むつかしい

松島章子(兵庫県)

・我家では夫が煮メを作るので毎年寒しみに食べています

張山てる子(東京都)

・棒だらの炊いたん(京都弁?)

渥美 保(滋賀県)

・「筑前煮」亡き母の味が恋しい

阿部澄江(宮城県)

・うま煮(筑前煮)

有田裕子(北海道)

## ●れんこん

・れんこん

椋本望生(大阪府)

・れんこんの煮物

高橋登志子(新潟県)  
濱田イサオ(福岡県)



## ●たまご

・出し巻卵

田中豊恵(新潟県)

・錦卵：自分では作れないのでいつも買ってきます

一瀬正子(埼玉県)  
永田歌子(埼玉県)

## ●雑煮

・雑煮

溝畑美代子(埼玉県)

・お正月は朝の餅入り雑煮です

藤井春三(埼玉県)

・すまし汁の雑煮(昆布、椎茸、削り節でとった出し汁に餅、水菜を加える)

中村康浩(福岡県)

## ●海老

・雑煮餅

長谷川則子(新潟県)

・蛤雑煮

間森 坦(兵庫県)

・えびフライ

白松いちろう(千葉県)  
鈴木義雄(福島県)  
坪田勝秀(鹿児島県)

## ●郷土料理

・ノツペ汁

夏井寛治(新潟県)

・ナメタガレイの煮付け。岩手では必ず作ります

平山千江(岩手県)

・義母伝授の「のっぺ」

小林七重(新潟県)

## ●田づくり

・田づくり

沢山つくつて楽しみます  
合田浩子(茨城県)

## ●魚

・鯛や鯛などの焼き魚

平林義康(兵庫県)

・鯛のつけ焼き。香が良い

居原田暹(大阪府)

・鯛の煮付け

湯浅芳郎(岡山県)



## ●羊羹

・手造り羊羹(ピンク色です)

田村よし(茨城県)

・ゆず入り芋ようかん。ゆずの香りがほんのり

清水君江(埼玉県)

## ●たくさん

・数の子、鮭の飯鮓 梶鴻風(北海道)

・数の子、ごまめ、菊花かぶ

中山日出子(大阪府)

・栗きんとん、てりごまめ、ごまめ、かずの子、こぶ巻等すべて好き

岩村 昇(神奈川県)

・ごまめ、棒だら、黒豆が大好物。いつまで手作りできますでしょうか

奥那於子(大阪府)

・黒豆、栗きんとん、昆布巻、八幡巻、おなます

古閑智子(神奈川県)

・黒豆、酢蓮、寒天、栗きんとん、小鯛の焼、ちよろぎ

光成高志(千葉県)

・伊達巻とごまめ、また赤い草石蚕を見る

寺内 信(埼玉県)

・焼豆腐、骨まで食べる鮭の粗の昆布巻、棒鱈、竹輪、人参、ごぼうを甘辛に味付けした母が作ったおせち

村山徳英(埼玉県)

・田作と慈姑。二つ挙げるのは欲張りですか

今井勝子(新潟県)

## ●その他

・草石蚕(ちよろぎ)

福岡 悟(東京都)

・くわい

岩崎令子(大阪府)

・特に酢だこが好き

大谷 茂(埼玉県)

・イレギュラーですが、カマンベルチーズ

白戸麻奈(東京都)

・毎年手作りのローストビーフが主役

関山恵一(神奈川県)

・あわび

坂元正憲(東京都)

・毎年食べるトラバ蟹

伊藤 修(埼玉県)

・種々の寒天を流し色どりすること

木村 舂(山形県)

・酒の肴になるものすべて

久本にい地(岡山県)



看板商品「しお豆」をはじめ、手作り・素材にこだわった食品を製造販売している新潟県新発田市の宮野食品工業所様。企画開発・品質管理部長の宮野奈緒子さんに「おせち」への想いをお書きいただきました。

## 大切なのは形よりも心

## 宮野奈緒子



子どもの頃は母が忙しく、おせちと言えは専ら市販品を購入していたものです。小さい頃から甘いもの好きだった私のお気に入りにはやっぱり「栗きんとん」！まさか大人になって食品メーカーに勤め、自分が栗きんとん作りに携わるとは思ってもみませんでした。

社会人になった入社一年目、初めて携わった栗きんとん作りはすべてがほぼ手作業。こんなにもたくさんの方の手がかり、想いが込められ、一つの商品が出来上がるのだから、その時受けた衝撃と感動は今でも私の仕事の原点になっています。そんな私も母となり、お正月には子どもと一緒に我が社の栗きんとんを食卓に並べるようになりました。

一年で一番のハレの日を彩るおせちは、幸福を運んでくる新年の神様(年神様)を我が家へ迎え、おもてなしするための食べ物。お参りと同じくらい大切です。そして大切なのは形よりも心。たとえ一品、二品でも、心のこもったおせちを用意したいものです。

## 編集室だより

生きているといろんなことが起こります。一日の中でもあんなこと、こんなこと、ほんといろいろとありますね！ そんな日常に転がる喜怒哀楽を、編集室よりお届けします。

**感謝！**

**おかげさまで16周年**



おかげさまで、2019年10月10日で私ども(株)ミュージズ・コーポレーション 喜怒哀楽書房は16周年を迎えました。ひとえに皆さまの温かい応援、力強いご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

当日の昼休みお祝いが催されました。ケーキを中央に、乾杯！(お酒ではなく、おいしい紅茶です)



ケーキ入刀。スタッフ松野がすかさず提供した、均等分けのガイドラインを表示する、スマートフォンのアプリ。時代は変わりましたね～。皆で食べたケーキの美味しかったこと。

最後に集合写真をパチリ。これからも、皆で力を合わせて、健やかにほがらかに未来に向かって歩みつづけます！今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。



**木戸敦子、取材で関西へ。**

弊社スタッフ木戸が、11月上旬に関西方面、京都・大阪・岡山・神戸とめぐってまいりました。道中、なにやらあった様子(笑)。以下、木戸のレポートをご覧ください。

「伊丹から電車で京都へ。ホテルに着き荷物を開けると、最後に入れようと思っていた化粧ポーチ式を入れ忘れたことが判明。約束の時間まで少し散策できるかと思いきやドラッグストアを探し安い化粧品をゲットすることに終始。事なきを得たものの、せっかくの京都なのに(泣)。それにしても、京都の街並みはやはり他にはない風情があり右に左に完璧なおおりさん。お客様と行ったお店は、私たちの姿が見えなくなるまでずっとお辞儀をしてくださり、はんなり京都の心遣い、見習わなくては。その後はお二人とカラオケナイト。70、80代はエネルギーギッシュ!!



岡山は街の中に西川が流れていて、ランニングシューズは持ってこなかったので緑道を朝の散歩。

お会いした小西様(本誌4頁掲載)は、仕事を終えお忙しいなか、待ち合わせのホテルのラウンジに自転車で駆けつけてくださる。ヒリヒリするような句の印象と違い、ふ



んわりした雰囲気をもとい、でもお話をお聞きすると結構な体育会系(笑)。句会や吟行の際は着物姿が多いとか。本物も見てみたい！

「青垣」大阪句会(本誌2-3頁)では、自身も句を出したもののかなり玉砕(笑)。お仲間に入れていただき僭越ながら講評などしているうちに、自然と関西弁が乗り移っている。関西弁強し！そして句会の後の一献は実に楽しい(\*^^\*)

お時間をつくってお会いくださった皆様、ありがとうございました。ぜひ新潟にもおいでください！



**表紙検品の様子**

当社では、ページを貼り合わせ、本の形にする前に、表紙の検品を行っています。この工程で、印刷や加工の際にキズや汚れが生じなかったかを確認しています。

上写真の検品は、白い表紙でなおかつツヤ加工がされており、いつも以上に慎重にチェック…。ほんの少しの異変も見逃すまい！と、視覚に全集中。

表紙の検品後、製本され、納品前に再び検品をします。ひとつひとつの工程を丁寧に確実に、をモットーに日々お仕事をさせていただいています。





▲坂口謹一郎

## 世界に知られた酒博士

### 坂口謹一郎

伊豆名 皓美

ユネスコの無形文化遺産となった「和食」。その基本を成すのは米です。にいがた文化の記憶館では、新潟の米と酒を食文化とともに紹介する企画展示「新潟の米と酒」を開催します。

そこで今回は、世界に知られた酒博士・坂口謹一郎（上越市出身・1897～1994）を紹介します。応用微生物学の世界的な権威として知られた科学者です。応用微生物学とは、微生物（藻類、真菌、細菌）の働きを研究し、その働きを農業、食品、化学、環境、健康などの分野に応用する学問です。

坂口は高田中学に入学して間もなく小児麻痺にかかり、歩けるようになるまで3年かかりました。病気を克服後、東京の順天中学に編入。近くには本の街神保町があり、中学時代は思い切り文学の世界に親しむことに時間を充てたといえます。その後、最難関といわれた第一高等学校（東京大学教養学部的前身）に首席で合格、東京帝国大学農学部に進学しました。ここで坂口は後に生涯のテーマとなる発酵に出会います。発酵とは微生物によって物質が人間に有益な有機物に変化する現象のことで、発酵によって作られるものには漬物・味噌・醤油・酒・納豆など食品のほかに、ビタミン剤や医薬品もあります。

坂口が東京帝国大学農学部の教授になった1939（昭和14）年の翌年、東京上野のビアホールで「泡はビールなりや否や」事件がおきました。お客がビールの泡が多いとクレームをつけ、裁判に発展したのです。坂口が法廷でビールよりも泡の方がアルコール濃度が高いことを証明し、「ビールの泡もビール」と判決が下されました。この「ビールの泡裁判」はバラエティ番組「トリビアの泉」で紹介されたことがあります。また「林先生が驚く初耳学！」でも取り上げられ、番組の中で林修氏は坂口の著書『世界の酒』『日本の酒』も紹介しています。坂口は研究を通して、日本酒の製造方法や奥深さを論じた著作も多く発表し、酒文化の発信に力を注ぎました。

また坂口は、日本初の微生物学研究の場である「東京大学応用微生物研究所（現在の東京大学定量生命科学研究所）」創設に尽力しました。坂口が最も研究した微生物が、米や麦、大豆を発酵させる麹菌です。坂口の研究により、一種類だけと思われていた麹菌に数種類あることが分かりました。こうした数々の業績により、日本学士院賞、文化勲章の榮譽に輝いています。

坂口はすぐれた歌人としても知られ、歌集に『発酵』があります。本人は謙遜して「うたのようなもの」と言っていたようですが、1975（昭和50）年には宮中歌会始の召人に選ばれ、次の歌を詠みました。いそしみていや醸み糺がむにひなめのまつりにはのしろきくろきを

#### 【展覧会情報】

#### 企画展示「新潟の米と酒」

会期：2019年12月20日(金)から2020年3月15日(日)

休館日：月曜日（ただし1/13、2/24は開館）、年末年始（12/28～1/3）、1/14(火)、2/25(火)



# “ありがとう”俳句人生に乾杯!

# 6

俳句によって人生をより豊かで充実したものとされてきたその俳句人生の一端を6回にわたり雄弁に語っていただいた本コーナーも今回が最終回。次回からは俳句の添削講座がスタートします。乞うご期待!

## 我が俳句人生はむすびの地にて乾杯です

岩田 桂

今回にて私のメッセージは最終となります。俳句の何を持って人生の誇りとなすのか。

さらに私たちの俳句人生が目指す終着点とは、一体どこなのか。私自身が何処を目指そうとしているのか。そんな晩年の疑問と想いを辿るべく、最終のページを公開させていただきます。笑読ください。

まずは私と俳句との最初の出会いについてです。なんと私は子どもの頃から、松尾芭蕉様にお会いしてきました。私の生まれた故郷は、かの「美濃の大垣市」なのです。

なぬ、大垣だって、そこは芭蕉の奥の細道の結びの地じゃないかい。ハイ、そうなんです。子どもの頃から、水門川の船町に備えられた、芭蕉様と谷木因様の銅像を拝していました。

もちろん俳句のハの字も知らない私でした。しかし私の心には、おそらくその頃に、俳句への想いが脳裏に染みついたと思います。それが五〇歳になった頃、魂となって芽吹き出した気がいたします。

松尾芭蕉様こそ、私の俳句人生の先導師なのです。大垣に帰省するたびにその想いが蘇ります。芭蕉像を見ながら詠んだ一句があります。

芭蕉忌や美濃大垣は水どころ

芭蕉様の奥の細道紀行は、「千住」(始発) ↓ 「日光」 ↓ 「白河

の関」 ↓ 「松島」 ↓ 「象潟」 ↓ 「以下省略」 ↓ 「出雲崎」 ↓ 「金沢」 ↓ 「大垣」(終点) の、およそ二四〇〇キロの死生観の旅路とも言われています。多くの俳人が今も追い求める旅路でもあります。

芭蕉様は、一週間ほど大垣の人々と交流してすごしたあと、水門川を舟でくだり桑名へ旅立ちました。そして、わかれるときに、

蛤はまごのふたみにわかれ行秋ぞ

という俳句を詠まれました。あの著名な名句です。

そして五年後の五一歳で亡くなられ、大津の義仲寺にて永眠されました。

芭蕉忌や

美濃大垣は

水どころ



芭蕉忌や

翁は杖を

こころに置く



私の俳句人生は「奥の細道」を巡りながら、はや二五年を過ぎようとしています。横道です。まさかこんなに楽しく、長く多くの人たちや俳句とお付き合いてけるとは、ありがたい。

ならばこのまま、私はどこまでも俳句人生を楽しみながら歩き続けたい。しかも私の俳句人生はここ奥の細道の結びの地を終着点としたい。これが結論です。

これからも蕉風に吹かれながら、この「結びの地」をめざして頑張ろうと思います。

長きにわたりご笑読いただきました。ありがとうございます。わが俳句人生に乾杯です。

## 国民文化祭にいがた2019 良寛さまゆかりの地を巡る吟行ツアー

10月27日、国民文化祭「<sup>ことば</sup>フェスティバル」の一環として、参加者52名と俳句選者の中原道夫氏、高野ムツオ氏、大久保白村氏、短歌選者の梅内美華子氏の同行で、出雲崎から和島を巡る吟行ツアーが開催されました。秋時雨も午後には止み、全国良寛会の小島正芳氏、本間明氏のガイドのもと良寛さまを堪能した後は、参加者が俳句と短歌を即吟し、各選者による選評が行われる贅沢な吟行ツアーでした。



## 『ご縁ブック2019』お送りします

皆さまの合同の句歌集『ご縁ブック2019』。皆さまの合同の句歌集『ご縁ブック2019』。現在、鋭意製本中!12月中旬に発送予定です。残部が若干数ありますので、お早めにお問い合わせください。



## 野菜のポストカード

1セット12枚入り1000円(送料込み)です。今回は大根を同封しました。美味しそうな野菜で、季節のメッセージを送りませんか。ご注文は同封の振込用紙をご利用ください。



## 上林洋子さんが「新潟出版文化賞」を受賞!!

昨年、当社で『歌集 かたくりの花』を出版した上林洋子さんが「第11回新潟出版文化賞」の選考委員特別賞(藤沢周賞)を受賞しました。この賞は、新潟県内の方が執筆した自費出版図書に光を当て、広く紹介することを目的に、優れた作品を顕彰している全国でも珍しい文学賞です。11回目の今回は92点の応募作品から、作家の藤沢周氏を選考委員長として、大賞1点、選考委員特別賞(藤沢周賞)1点、優秀賞12点が選ばれました。



選考委員長の藤沢周氏はコメントで「全盲の作者がこれらの優れた歌を作ったから、ではなく、奇跡的なほどに鋭く優しい感受性が日常の一瞬一瞬を緻密に捉え、人間の生を小説以上に表現したことに、プロの歌人も脱帽するだろう」と述べていました。

4代目の盲導犬・ユズとともに登壇した上林さんは歌集を上梓した経緯を含め、この本が切り開いた新たな出会いについても話されていました。受賞、本当におめでとうございます。当社で出版された本も8点応募されていて、改めてますますいい本づくりのお手伝いをしてい!!と意を新たにしました。



## 俳句の添削コーナーをはじめます

次回より、皆様からご投稿いただいた俳句から一部選んで添削するコーナーをはじめます。お楽しみに!



## スタッフの一言 Q. おせちで好きな料理は何ですか?



決してふっくらとしてはいけない。かつちかちでしっわしわの黒豆!!あの味を毎年母にリクエストしていたが、レシピがない今となっては偶然の産物。豆の好みは体を表す!?



おせちでたくさん食べてしまおうのは、黒豆、栗きんとん、寒天。母の手作りです。あとは、数の子が好き。好きというよりも、お正月に食べるもの!という思いが強い(笑)。



紅白なます、数の子、かまぼこ、田作り、海老。松前漬けも楽しみです。お正月が明けると、体重が増えている。



我が家のおせちにしか入っていないのかもしれませんが、お正月にしか食べられない高級品…「いくら」です!年一回の特別さを噛みしめながら、いただきます。



私の実家ではなぜか、父親の作る煮豚とラーメンが、おせちの替わりでした。あの絶妙な味は私には再現できません。



重箱に入っているおせち…実際見たことも食べたこともありません。数の子、酢だこ、酢まめ、のっぺは毎年欠かさず食べます。あとは豪快な母が作るどんぶり茶碗蒸し。



私の田舎では子どもの頃、重箱に入ったおせち料理は雑誌やテレビで見る都会のものという感じ。お正月料理は、のっぺ、茶碗蒸し、荒巻鮭、イカと大根おろしとレモンのなますです。



お正月らしさを求めてスーパーでかまぼこ、伊達巻、黒豆など購入。栗きんとんは娘の好物なので一緒にたくさん作って重箱の2段目を埋めつくします。



我が家のおせちの中身は、ほぼほぼ酒のお供なのでやはり数の子です。あと海老や浸し豆、黒豆、塩引き鮭を食べます。そしてお正月だけいただける日本酒の翁。最高な御馳走。



おせち料理をあまり食べないのですが、錦玉子と海老が好きですかね。来年は健康で活動的な一年になるようお願いをこめて黒豆を食べようと思います。

## 顔見世

小泉 芝雲しゅうん

俳句の歌舞伎関連季語で、「初芝居」と共に知られている冬の季語に「顔見世」があります。江戸期に於いて「顔見世」は歌舞伎年中行事の一つとして毎年十一月に行われ、向こう一年間その劇場に出演する新しい顔ぶれを披露する興行として当時は最も大切に取扱われておりました。

十月になると楽屋や、芝居茶屋などで、各座元、金主らが集まり役者の振り分けの話し合いがなされ、各劇場の前には酒樽や蒸籠が詰まれて景気をおおひ、芝居茶屋では店先に鼻唄から役者へ贈った引幕の箱を飾るなどして、これらを見物する群衆で芝居町はにぎわったようです。上方から下ってくる役者、江戸から上る役者もこの機会に入座することが通例で、これを迎える「乗込み」の式が月末にあり、十一月一日は座元はじめ劇場関係者は、袴や羽織袴で訪れあい祝儀を述べ、当に芝居国の正月として雑煮を祝うなどしていたのです。十一月に演じられる特殊な狂言を「顔見世狂言・舞踊」と称し、『暫』、『関の扉』等の狂言が必ず演じられました。

江戸では、初日は十一月一日が通例で、観客は前夜から徹夜で入場していました。初日から三日間は明け六ツ(六時)頃に始まった様です。しかしこのような行事も江戸では幕末期には廃絶しており、今日では京都・南座の十二月を顔見世興行(初日は十一月三十日)とし、年一度の大きな興行を行う形で、わずかにその面影を残しているだけです。因みに十月の名古屋御園座及び十一月の歌舞伎座の顔見世はキャッチフレーズとして使われている感があります。京都の顔見世は今日でも趣があり、毎年十月に入れば出演の役者、出し物も決まり、街中には「当る子年吉例顔見世興行・当代合同大歌舞伎」(翌年の干支が必ず頭に入る)のポスターが貼られ、十一月中頃には独特な勘亭流の文字で出演役者の紋と名前が書かれた「庵看板」、その下には出し物の絵看板が掲げ



好評の本コーナーも最終回。季節の巡りとともに歌舞伎の季語をベースに、日本文化の奥深さを魅せていただきました。「よっ小泉屋!!」ありがとうございました。次回からは若手男性俳人に「俳句と身体」についてお書きいただきます!

られます。そして屋根の上には「櫓」が設けられ櫓の先には「梵天」がつけられます。

東京歌舞伎座は引き看板こそありませんが、正面屋根上に「櫓」が組まれ、櫓の正面に坐紋の「鳳凰丸」が、側面には「木挽町・きやうげんづくし」の文字が染め抜かれた幕が張り巡らされます。

顔見世にてこれまで上演回数が多い狂言は『勧進帳』、『廓文章』、『寺子屋』、『寿曾我対面』ですが、最近は襲名興行を兼ねることが多いので、襲名役者の所縁狂言を中心に上演されるように思われます。因みに平成三十年の高麗屋親子三代同時襲名(二代白鸚・十代幸四郎・八代染五郎)がありました。今年は今和の御代最初の顔見世として上方に所縁の深い坂田藤十郎親子(四代藤十郎と中村鴈治郎、その息子壱太郎)や松嶋屋親子(仁左衛門、孝太郎、千之助)等による親子三代揃いによる『金閣寺』や『忠臣蔵・七段目』が目玉として演じられています。以上のような「顔見世」の雰囲気詠んだ俳句を掲げておきます。

顔見世を見るため稼ぎ溜めしとか	高濱 虚子
顔見世とあらば仕事を休まうか	黒川 悦子
東都繁昌顔見世日和つづきけり	久保田万太郎
顔見世やまねきに並ぶ子役の名	戸板 康二
顔見世や見得極れる松嶋屋	藤井佳代子
顔見世や成田・成駒・松嶋屋	小泉 芝雲

今回で「歌舞伎歳時記」も終わりですが、一年間お付き合いいただき有難うございました。

観て聴いて詠んで楽しむ芝居かな

芝雲

完

2019.12-2020.1. vol.107 (2019年12月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

喜怒哀楽書房



株式会社ミュージズ・コーポレーション

☎ 0120-819-395 Facebookもチェック



e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージズ・コーポレーション

## 編集後記

今号で2つのコーナー「俳句人生に乾杯」と「歌舞伎を詠む」が終わります。小泉さんには1年にわたり歌舞伎の季語を元に知らない世界を教えていただき、岩田さんにはその前の4年間の「食楽句楽」から5年にわたって俳句の楽しさ、喜びをユニークな筆致で展開いただきました。心から感謝しています。始まりがあれば終わりがくるのは世の習い。「新しい酒は新しい革袋に盛れ」の言葉のごとく、来たる年はバージョンアップしてお目にかかりましょう。本年もご愛顧いただきありがとうございます。(木戸敦子)